

序

この物語は、吉川英治『三国志』の総集編です。

吉川英治『三国志』は、二十世紀前半に書かれた物語です。戦後日本人は、この本を通じて三国志に親しんできました。大学で三国志を研究している先生の中にも、「吉川英治から入った」という方が大勢います。

二十世紀後半に描かれた横山光輝の『三国志』という漫画も、吉川英治『三国志』が元になりました。

三国志に興味を持ち始めた（かも知れない）という方には、断然、吉川英治をお薦めしたいのですが、問題点が三つあります。

- 一、長すぎる（二〇一三年刊行の新潮文庫版で全十巻）
 - 二、言葉が難しい（漢字や言い回しに馴染みがない）
 - 三、登場人物が多くて覚えられず、ストーリーを見失う
- これらの理由から、自信を持って推薦できないのが実情です。

吉川英治の本に挫折し、おまけに三国志からも遠ざかってしまったら、もったいないと思います。横山光輝の漫画にも同様の問題があり、三国志への敷居を高くしているようです。

最初に読む三国志は、どんな本がいいでしょうか。

解説やあらすじは、読みやすいのが長所ですが、味気ないと感じます。はじめて三国志を読むときは、誰だって結末を知りません。どこの国が勝ち、どこの国が敗れるのか。三国志の英雄たちと気持ちを共有し、魅力を味わい尽くすには、小説の形式が適しているでしょう。

そこで、吉川英治『三国志』の壮大な物語の趣向（おもしろさ）は損なわず、しかし、コンパクトな分量で、かつ平易な言葉を使い、登場人物を最低限に絞った「総集編」を作りました。

なるだけ筆者（佐藤）の独自解釈を交えることなく、原書の物語を尊重しています。歴史書に記録がない逸話もありますが、それも含めて物語の一部ですから、作中の出来事を「歴史書に基づいて改める」といったことはしておりません。

ただし、矛盾したことを言うようですが、三国志のおもしろさは、実際の中国の歴史が題材となつているところです。当時（二世紀末から三世紀）の制度等に照らし、明らかに誤りと思われるところは、ストーリーを壊さない範囲で修正しました。また、原書の説明不足と思われる部分は、適宜、歴史の知識を補いました。

皆さんが三国志に関心を持ち、興味を深めていくきっかけの本となることを願っています。